



今季も県内各地域の機関の皆様を訪問させていただきました。人口密度が比較的多くはない地域では、都市部に比べると活用できる資源は少ないものの確実に医ケア児とご家族はいらっしゃる中で、支援の工夫や新たな構想などをお聞かせくださいました。地域に根差した連携力を感じ、課題検討のアイデアも沢山いただきました。貴重なひと時をありがとうございます。是非、かたちにしていきましょう！

紙面の都合で訪問させていただいた全ての皆様を掲載できず、お詫び申し上げます。
(後藤美紀)



ご案内

● 2023.10～2024.3月 県内医ケア児全数把握調査関連

山形県や各保健所、市町村、病院と連携し、これまでの全数調査から更に踏み込んだ調査を予定しています。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

● 2024.春 診療報酬等同時改定

診療報酬、介護報酬、障害福祉サービス報酬の同時改定が予定されています。短期入所や教育・医療の連携関連など、医ケア児関連も協議されています。チェックしていきましょう！

● リレーエッセイ

次号より、地域のみなさまからのリレーエッセイを予定しております。お楽しみに！
バトンを受け取られましたら、どうぞよろしくお願いいたします！



編集後記

2023年が駆け足で過ぎ、あっという間に2024年を迎えました。昨年は春から就園や就学に関するご相談を多くいただきました。医療的ケア児の皆さんが地域の園や学校へ元気に通うことを実現できるように話し合いを重ねるなかで、関係する皆様の熱い想いを感じ取ることができました。

本年も医療的ケア児の皆さん、地域の方々と一緒により良い地域づくりに協力ができればと考えております。また、研修会・講演会の企画や小児訪問医の養成事業等の充実を図り、支援の輪を広げていきたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(中村和幸)



ごあいさつ 三井 哲夫

ちょっと遅ればせながら、皆様本年も医療的ケア児と
また医療的ケア児等支援センターをどうぞよろしくお願いいたします。



今年は1月1日から能登半島地震で大変な幕開けでした。道路は寸断、電気・水道は止まり、医療的ケア児の状況も心配されましたが、幸いにも既存の地域小児呼吸器ネットワークを通じて、呼吸器の必要な方は、金沢市内を中心とした基幹病院に全員早期に移送され、無事であったことが震災後数日で確認されました。ネットワークを通じたやりとりが功を奏した形です。普段からのやりとりが重要ですね。



巡る季節に佇む大木
撮影：2024.1後藤美紀

山形県医療的ケア児等支援センターの愛称が「にこすく」に決まりました。皆様から愛称候補を募集したところ、県内はもちろん全国から実に448件の応募をいただきました。関心の高さが伺えます。最終的に「にこにこすくすく」ということで「にこすく」です。素敵な名前ですね。これからも当センター「にこすく」をよろしくお願いいたします。

さて、前回のニュースレターで私が書いた山形市内街中の
ちょっと良い場所、わかりましたか？

正解は八日町の常磐稲荷神社境内です。
どっしりとした大木が空をつら抜き、木漏れ日も気持ちのいい素敵な所です。皆さんも行ってみてください。



愛称募集メッセージを ありがとうございました

愛称募集の応募には「一人ひとりが自分のペースで成長して輝けるように」「誰もが山形県の宝であり守ってほしい」といったお子さんに向けた思いはもちろん、「いつも応援しているよ」「そばにいるから...」と日々ケアに当たっているご家族にも心を配ることばがたくさん添えられていました。

また、様々な機関・職種の支援者のみなさんへのエールも数多く寄せられました。

医療的ケアを必要とするお子さんやご家族への理解がより一層深まること、相手そして自分の個性を認め合い互いに尊重できる生活、様々な視点から柔軟な支援体制が整い、当たり前学んだり楽しんだり、誰もが笑顔で暮らすことができるようになって欲しい、といった社会に対する望みは、共通の願いであり、目指す姿なのではないでしょうか。

自分事としてできることをしよう！支援が行き届いて欲しい！！と、愛あふれる気持ちで見守っている驚くほど多くの県内外のサポーターの存在をとっても心強く感じました。あたたかい思いを胸に、支援者全員が心をつなぐ、つながり、支え合い、健やかな成長や生活のため、地域作りに向けた架け橋とされるよう歩んでいきたいと思っております。



「医療的ケア児の 学校生活に関する実践 ～看護師の視点より～」

今回は、「医療的ケアを必要とするお子さんの看護スキルアップ研修（8月開催）」を深化させた「医療的ケア児の学校等生活に関する実践 ～看護師の視点より～」として、12月に実践共有会を開催しました。医療的ケアを必要とするお子さんが地域の園や学校へ就園・就学するとき、教育と医療の新たな連携がうまれています。実践報告者に、県内で訪問看護ステーションから保育園へ訪問看護を実践されている看護師さんと、他県にて教育委員会に配属されている医療的ケア児コーディネーターさん（看護師）をお招きし、教育現場および保育園への訪問看護実践のご報告をいただきました。

主な対象は地域および医療機関の看護師や園、学校関係者です。医療や教育分野をはじめ、様々な機関から150名ほどのご参加をいただき、皆様のご関心の高さ、そして医ケア児への成長・発達支援に対する情熱をビシビシと感じました。アンケート回答から、いくつかのご意見を紹介します。



1. ご感想

これからの訪問看護は在宅だけでなく、保育園や学校など、在宅以外の生活の場面での支援も必要になってきていることを知りました。（訪問看護ステーション看護師）

校内研修会がまだ整ってはいない現実があります。新規で担当になった人が、なるべく不安なく業務にあたれるとよいと日々感じています。（その他の職種）

学校での取り組み、保育園での取り組み。どちらも行政との連動があって医ケア児の医療だけでなく、生活を意識した取り組みを感じました。（ソーシャルワーカー）

医療的ケア児の受け入れには、看護師必須であるが、それが課題となっている現状。今後、スムーズに体制が構築されることが望まれると改めて感じました。（保育士）

教育委員会所属の看護師がいること、看護師の指導的立場の人がいることは、現場にとってどんなに安心感につながるのか、と感じます。日常的に浮かんでくる疑問を、専門的な立場から助言いただけることを羨ましく思いました。（その他の職種）

医ケア児を地域で支えるためには、多職種の連携が大切だと感じました。医療的なケアが必要でも、小さい頃から同じ地域に暮らす子ども達と一緒に過ごせる地域になったらいいと思います。私も看護師として支援していけたらと思いました。（訪問看護ステーション看護師）

先進事例を知ることができ、とても参考になりました。行政で医ケアコーディネーターを配置し、市立だけでなく民間立も含めた包括的な支援を行う体制が必要だと感じました。（行政職）

行政の話や受け入れるにあたっての必要機関との連携などの話を多く聞くことができ、医ケア児が今後どのような環境で教育を受けるのかを考えるよい機会になったように思う。保育園の考え方と医療従事者の考え方に違いがあることをこれまでも感じるがあったため、医ケア児が保育施設や学校という集団の場に入るにあたり、考え方のすり合わせも重要になってくるということも感じた。（園看護師）

他県教育委員会の指導的立場の看護師のお話が聞いて光栄でした。山形県には同立場の看護師はいませんが、いてくださると様々な立場との連携がより上手いくのかなと感じました。指導的立場の看護師の配置は特別支援教育課としても前向きに検討してくださっているので、ぜひ設置されるとありがたいです。訪問看護師の設置というのは新しいと感じつつ、良い取り組みだと感じました。医ケア児は体調の関係もあり、毎日の登校ではないお子さんもいるので、この日は来てほしいなど事前に申請し、来ていただける制度があるといいと思います。（教員）

実際に活動したいと感じました。個人的には、事業所として、園や学校に Outreach したいくらいです。（訪問看護ステーション看護師）

2. 県内の医ケア児支援・地域づくりへのアイデアや期待

学校教育の中で、後補充看護師という制度を設けています。校外学習に行く医ケア児に看護師が同行し、その間学校に登校している他の児童生徒のケアの補助などを担う看護師となりますが、この後補充看護師がもっと臨機応変に対応して下さる雇用形態だとありがたいです。看護師の予定の休みなどに代わりに勤務いただくとか登校の児童生徒数が多い日に勤務していただくとか。こうしたシステムがあると学校としては有難いですが、後補充看護師の方のスケジュール(急な出勤は大変)や勤務の仕方には課題が残ります。（学校教員）

実際に受け入れている学校や園の方と看護師(コーディネーター)等と一緒に話せる企画で、事例をみんなで考えるなどはいかがでしょうか。（訪問看護ステーション看護師）

今回のテーマを、ぜひ継続開催して頂きたい。教員や養護教諭、学校看護師のそれぞれの立場からの発表や、保護者の視点からの内容もぜひ聞いてみたい。（学校看護師）

ご参加の方が仰っていたように、支援は医療面の相談だけではないと思います。それぞれのプロフェッショナルが連携することがとても大切で、偏った言い方になってしまいますが、学校の中で看護師さんだけが突っ走ってしまうと孤立してしまいます。学校現場の中に看護師を理解してくれる人も必要です。教育側にもっと協働する職員としての看護師を理解する必要があると思います。そのためには看護師の勤務形態や立場を明確にすることが必要だと思います。（教員）

学校への医師の指示書について、学校空間に配慮した医療指示書はとてもありがたいです。医療と学校が対話ができるような関係を築くことも大事であると考えます。（教員）

ひとり職の看護師さんが悩みを話したり、新たな取り組みを知ったりするためには、まずは「他の実施校とつながる」はどうかと思いました。横に繋がるシステムづくりをし、看護師さんが1人で抱え込まない工夫ができるかもしれないと思いました。管理職の意識でできることも知れません。（教育委員会職員）

医療的ケア児の看護に携わってもよいと思う看護師もいるだろうが、雇用形態、就業状況、仕事への責任が大きな課題であると思う。山形県内でも各地区での研修会の開催をする事で関心を持つ担い手がいると思われる。（医療機関看護師）

LINEやZoom等で手軽に相談できると良いなと思いました。（園看護師）

研修の中でもあったように、一番は対話だと思います。その時間をつくるのが大変な日もあるかとは思いますが、直接日々の様子を見ている先生や保育士の先生からのお話が連携には必要不可欠だと考えています。定期的に関係機関との話し合いが出来ればいいと思います。（訪問看護ステーション看護師）

現時点で本校内で大きな課題になっているのが、学校看護師は泊りを伴う学習には引率できないという「勤務上」の縛りです。保護者が引率できず、修学旅行に参加できないかもしれない子どもがいます。訪問看護などの人材を学校でも活用できるしくみができれば、というのが一案として浮かんでいます。（その他の職種）

休む時の代休看護師がいてくれるとありがたい。（学校看護師）

山形県においても、地域の園へも学校へも看護師が、配置または訪問して看護を行う例が少しずつ進んでいます。ここで新たな訪問看護ステーション&園・学校&市町村の連携があり、お互いが「関係機関」となるとともに歩み始めています。

看護師の新たな活躍の場を広く知っていただくこと、現時点では学校等での訪問看護は診療報酬の活用ができないこと、教育現場と医療・看護とのより一層の協働など、整理や理解が求められることは山積ですが、解決に向かい様々な協議や工夫が進められています。ないものを嘆いてばかりはいられません。制度のせいばかりもしてはいられません。ないからこそ“あるもの活用”の工夫を、地域の皆様が新しいことを受け入れつつ実現されていく過程に関わってゆけるありがたさを感じつつ、新たな地域のしくみづくりに希望を膨らませております。（文頭・文末 後藤美紀）